2026年度

都立自校作成型オープン試験

国　語

時間 50分・100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。

2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。

3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも
回収される。

郁 文 館 高 等 学 校

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 大自然の力を畏れる。

(2) 法令は遵守しなければならない。

(3) 会議に諮って決めるべきだ。

(4) 兄は将来を嘱望されている。

(5) 職員に綱紀粛正を求める。

---

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 祖父は朝からケワしい顔をしている。

(2) 自動車がケイテキを鳴らす。

(3) 小麦をセイフン所に運び込む。

(4) 顧客対応窓口をモウける。

(5) 今こそキキュウソンボウのときだ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

結女（ゆめ）は、おむすび販売店『おむすび・結（ゆい）』の店主である。ある日の早朝、常連客である高校生のひかりの注文を受けたところ、突然現れたひかりの母親が、ひかりを店の外に連れ出した。ひかりが店のおむすびを食べていることを知った母親は、今後ひかりを店に入れないように言う。ひかりは、母親の弁当は、見栄（みば）えはよくてもまともに口にできないほどまずいため、食べずに捨てていたことを告白し、母親から平手で叩（たた）かれる事態になった。ひかりは学校に向かい、母親はおむすびの写真が並んだ店の立て看板を指さして、「あなたが、こんなものをうちの子に食べさせるから！」と結女に言う。その後、一日が経過した。

ふらりとやってきた年配の男性を送り出すと、結女は入口にひっかけている「営業中」の案内プレートを返し、立て看板を畳んで店内に入れようとした。だが、ちょうどそのタイミングで、目の前の道路に停（と）まった車から人が降りてくるのが見えた。結女は、「今日もう終わりなんです」と言うのが苦手だ。お客さんががっかりして帰っていく背中を見るのが嫌なのだ。

もう一度、プレートを「営業中」に戻そうかと考えたところで、降りてきた人に見覚えがあることに気づいた。きちんと服装や化粧を整えていて一瞬わからなかったが、昨日店前で親子ゲンカをしていった、ひかりの母親だ。(1)結女と目が合うと、神妙な面持ちで深々と頭を下げた。

車をパーキングメーターの前に停めてもらい、店の中に招き入れる。店内に入ると、ひかりの母親はもう一度、昨日は申し訳ありませんでした、と言いながら頭を下げた。

「私はまあいいんですけど、ひかりちゃんは大丈夫でしたかねえ」

「その、娘は入院中で」

「えっ？」

ひかりが入院したと聞いて、彼女は心底驚いた。＊低血糖を起こして学校で倒れてしまったが、すでに回復してほかに問題はなく、日曜日には退院する予定である、という話を聞いて、少し安心する。

とはいえ、そんな事態になってしまったことに、結女も責任を感じざるを得なかった。ひかりの家の事情は知らなかったとはいえ、親子ゲンカの引き金になったのは、ひかりが『結』に来ていたことだからだ。ア〜お客さんに、できる限り美味（おい）しいおむすびを。そう思ってやってきたことが、結果としてではあるが、ひかりとひかりの母親の間に亀裂を生むことになってしまった。

「私、娘とどう話していいかわからなくなってしまって」

少しの間、結女はひかりの母親の話に聞き入った。自身の両親が食に無頓着だったこともあって、あまり料理に興味がないこと。夫は味にうるさくないので、それがまかり通ってきてしまったこと。毎日の食事を作るのはほとんど「作業」という感覚で、あまり好きではないこと。(2)そんな中、お弁当の写真を撮ってインターネット上に公開するのが楽しみになっていたこと。

ＳＮＳでは、当たり前のメニューを当たり前に作っても、誰も見向きもしてくれない。もっと注目を浴びたい。いろんな言葉が欲しい。そう思うがゆえに、どんどん「斬新な」お弁当を作ろうとしてしまった。問題は、

写真では味は伝わらない、ということだ。見た目がよくて、発想が面白いものであれば、いい評価がもらえる。「こんなに凝ったお弁当を作ってもらえる娘さんは幸せですね」というコメントをもらって、ひかりの母親は有頂天になってしまった。

結女にも、その気持ちはわからないでもない。

食事を作る時は、実際に食べる人のことを考えなければいけない、というのは、当たり前のようで理想論だ。主婦というのは悲しいもので、毎日仕事をこなしているうちに、「家事をやって当たり前」になってしまう。そのうちだんだん自分自身も慣れていって、相手の気持ちを考える、なんて面倒なことができなくなっていく。掃除や洗濯をこなしながら、毎日毎日、朝昼晩の三食を作るのに、いちいち難しいことなんか考えていられない。献立を考えるだけでも疲れてしまう。

せめて、食事の後に「美味しかったよ」の一言でももらえれば、少しはやる気だって出るだろう。でも、毎日の食事ごとにそんなことを言ってくれるできた夫や子供は、なかなかいない。作る人間が料理下手なら、なおさらだ。

ひかりの母親が、インターネット上の赤の他人から評価されるのを望んだ気持ちは、結女が『結』の経営に執着したのと、根っこは同じ感情かもしれない。家庭の中に取り残されて世間と乖離(かいり)していく自分を、誰かに見つけてほしい。誰かと結びつきたい。結女も、そんな欲求がふつふつと湧くことがあった。

「あの、お母さんね」

「は、はい」

(3)「よかったら、食べてみませんか?」

「え、あ、その、おにぎりをですか」

イ「うちのは、おむすびなんですよ。おにぎりじゃなくってね」

「おむすび?」

手を洗い、気合(きあい)を入れる。おむすびにするご飯は、まだ少し残っている。炊き立てとはいかないが、それでも美味しいおむすびを作る自信はある。

母が、結女におむすびの作り方を伝えた理由。それは、言葉にできない思いを伝えるためかもしれない、と結女は思った。誰にでも作れる簡単なものだからこそ、大切に作ろうとする気持ちが大事になる。主婦業というのは、すべてパーフェクトにこなすのは果てしなく難しい。だから、せめておむすびを大事に作ることで、家族を愛する気持ちだったり、自分の思いだったりを伝えることができるのではないだろうか。

ひかりの母親に言うべき言葉は見つからない。結女も、説教やアドバイスができるような立場ではないのだ。でも、ひかりに自分の娘のような思いはしてほしくなかった。

おむすび一個分のご飯を摑(つか)み上げて、握るのではなく、優しく包み込んで米の粒を結びつける。何度も練習させられた、おむすびの作り方。美味しく食べてほしい、という気持ちをしっかりこめて、塩むすびを作り上げる。

結女がカウンターに塩むすびを出すと、ひかりの母親は困り顔で目を泳がせた。謝りに来たのに、出されたものを食べていいものかと戸惑っているのだろう。

「それ、ひかりちゃんが初めて来た時に食べたおむすびなんですよ」

「ひかりが、ですか」

「美味しいって言ってくださってね。とっても嬉しかった」

(4) 結女の意図を汲みとってくれたのか、ひかりの母親は椅子に座り、塩むすびをじっと見つめた。そして、いただきます、と頭を下げると、戸惑いながらもおむすびを取り上げ、口に含んだ。ウしぐさが母娘一緒だわ、と、結女はかすかに笑った。

一口、二口。おむすびを噛みしめながら、ひかりの母親はうつむき、やがて肩を震わせた。真っ赤になった両目から、涙の粒がこぼれる。結女はティッシュケースを持ってきて、カウンターにそっと置いた。

「どうかしら」

「はい」

――美味しいです。

エ顔をくしゃくしゃにしながらも、ひかりの母親は、はっきりとそうつぶやいた。

(行成薫「本日のメニューは。」による)

〔注〕 低血糖――空腹などで血中の糖濃度が下がりすぎた状態で、意識障害などが引き起こされる。ひかりは体質的に低血糖状態になりやすく、この日は朝食と昼食の弁当を食べていなかった。

〔問1〕 (1) 結女と目が合うと、神妙な面持ちで深々と頭を下げた。とあるが、このときのひかりの母親の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 立て看板を畳んで店内に入れようとしているときに来てしまったタイミングの悪さを認識はしつつも、ひかりとの関係改善のための協力を結女に仰ごうと決意し、なんとか間に立ってもらいたいと頼み込む気持ち。

イ 親子ゲンカという見苦しい場面に結女を巻き込んでしまった申し訳なさがあり、本来は店に顔を出せる立場ではないと思ってはいるが、ひかりが入院してしまった事実だけはどうしても伝えておこうという気持ち。

ウ 入口にひっかけていた案内プレートを戻そうとしている様子を目にし、お客さんのことを考えて結女が行動していることを感じ取り、自分のために店を閉めるのを思いとどまってくれたことに対して感謝する気持ち。

エ ひかりとの関係に対する迷いは抱え続けているものの、時間が経過し親子ゲンカの最中のような興奮状態ではなくなって、まずは自分たちの問題に巻き込んだ結女に対し真摯に謝らなければいけないという気持ち。

〔問2〕 (2) そんな中、お弁当の写真を撮ってインターネット上に公開するのが楽しみになっていたこと。とあるが、ひかりの母親がこのような行動をとった動機に関して、結女が自分と共通していると感じる思いを、四十字以上五十字以内で説明せよ。なお、、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問3〕(3)「よかったら、食べてみませんか?」とあるが、この発言をしたときの結女の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 塩だけのおむすびを食べることで、料理は斬新さにこだわるべきではなく、誰でも作れる簡単なものであることが一番なのだとわかってもらい、ひかりにも家で美味しいおむすびを食べさせてほしいという気持ち。

イ 自分の作った塩だけのおむすびを食べてもらい、たとえ誰にでも作れる簡単な料理でも、大切に作ることにより、食べる人に言葉にできない愛情や思いを伝えることができるのだと感じ取ってほしいという気持ち。

ウ これまでに自分が何度も練習させられた塩むすびを食べることで、言葉では伝えることができない説教やアドバイスを感じ取ってもらい、簡単なものであっても料理は練習が大切だとわかってほしいという気持ち。

エ 本当に美味しいおむすびを食べてもらい、塩むすびを作ることすら大変である以上、主婦業をパーフェクトにこなすのは果てしなく難しいのだと感じてもらい、大変さを素直にひかりに伝えてほしいという気持ち。

〔問4〕(4)結女の意図を汲(く)みとってくれたのか、ひかりの母親は椅子に座り、塩むすびをじっと見つめた。とあるが、「結女の意図」として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 初めて店に来たひかりが食べて美味しいと言ったおむすびであると母親に認識させることで、ひかりと同じものを口にして美味しいと感じることによって、ひかりと気持ちが通じ合ったように思ってもらおうという意図。

イ 謝りに来た立場で食べるべきものなのかどうかを母親が考えているように感じたため、ひかりの話を持ち出すことによって謝罪を忘れさせ、余計なことを考えることなく目の前のおむすびを味わってもらおうという意図。

ウ 気まぐれに作ったわけではなく、ひかりが来店した際に食べたものと同じおむすびであると母親に伝えることにより、そのときにひかりが感じ取ったことを意識させ、おむすびと向き合う気になってもらおうという意図。

エ 食事をするつもりで店に来たわけではないという母親の困惑が見て取れる中、自分が作ったおむすびをひかりが食べてくれて嬉しかった思いを伝え、目の前に出されたものを作った人の気持ちを考えてもらおうという意図。

〔問5〕　本文中の〰ア〜エの表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　お客さんに、できる限り美味しいおむすびを。は、ひかりと母親の親子ゲンカの元になっても、おむすび作りを続けようという結女の強い決意を、「食べさせたい」という気持ちを省略して暗示的に表現している。

イ　うちのは、おむすびなんですよ。おにぎりじゃなくってね　は、結女がおむすびに対して特別なこだわりや深い愛情を持っていることを、ひかりの母親の言葉をわざわざ訂正する様子により印象的に表現している。

ウ　しぐさが母娘一緒だわ、と、結女はかすかに笑った。は、たとえぶつかり合っても、ひかりと母親の食の好みは全く同じであることを、結女から見た、母親がおにぎりを食べる様子の感想で客観的に表現している。

エ　顔をくしゃくしゃにしながらも、ひかりの母親は、はっきりとそうつぶやいた。は、これからひかりとの関係を改善していきたいという母親の希望を、擬音語を交えて表情に示すことにより象徴的に表現している。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに［**注**］がある。）

驚異的なスピードで進化しているＡＩが、さらに磨きをかけて「創造」を生み出していく可能性は否定できない。「人間の脳の優位性」と思われる特徴も、新系統の知性にとっては全く必要ないのかもしれない。

だが、脳にも活路はある。脳は世の中のあらゆる情報を受け入れる可能性を残しながら、情報を絞り込むように進化してきた。一方のＡＩは全ての情報を取り込む方向で進化している。(1)この違いは決定的であり、「全く違う系統の知性」と言ってもいいだろう。

そして、ＡＩは取り込むことのできる情報量は多いものの、対象を絞った時の「解像度」においては脳が勝ると言ってもいい。脳は注意を向けた対象に対して、五感全てを使って情報を集めることができる。そして、身体を動かすことによって対象に近づいて、さらに解像度の高い情報を取ることもできるのである。例えば、玄関先に置かれたシクラメンの花を見てみよう。寒い中でも凛々（りり）しく茎を立ち上げ、赤、白、ピンクときれいな花弁をつけている。近づいて見てみると、同じように見えていた一つ一つの花弁の形は異なり、色によってその厚みが異なっている。触ればしっとりと湿り気があり、ほのかに甘い香りがする。茎の下の方に密生している葉は、がっしりとしていて葉脈が太くて力強く、湿り気はほとんど感じられない。こういったことは、実物に近づいて見ればすぐにわかることだが、インターネット上の情報からは読み取れないことだろう。注目すれば、五感をフルに使った詳細な情報を採ることができるのだ。

(2)人間とＡＩとでは、言語の扱い方も違う。脳が行う文章作成はどのような原則で行われているのか。バイリンガル、それも10歳以降に外国語を習得した人が脳にダメージを受けた場合、母国語の方が外国語よりも障害を受けやすい。これは、母国語が限局された言語中枢を最も効率よく使っており、外国語はより広い範囲の脳を動員することによってようやく言語機能を発揮しているからである。

脳には生まれつき構造的に、格助詞の使い方、動詞の使い方、といった文章の構造把握に最適化した部位があると考えられている。つまり、脳は文章構造を把握してから詳細を詰めていく、という手法を取っていることになる。

一方、ＣｈａｔＧＰＴによる文章作成は、単語の後に来る単語を膨大な文章データの中から確率論的に予測し、最も妥当な単語を選び出してつないでいくことによって行われている。この点において、人間の脳とＡＩによるアプローチは大きく異なる。

人間の脳が獲得してきた「創造性」は、優れた情報を絞り込んだ末にそれらがつながることでしか生まれてこない。生成ＡＩがここまでになし得たことは、あくまで「～に似せた」新しい情報の作成ということであり、人間の仕事の効率化に貢献するとしても、「創造」はできていないのである。

生身の身体を持たないＡＩが、この先どんなにコンピュータ技術が発達してもできないことがある。情動がなく感情を持てないために、何かを積極的に追い求める指向性がなく、他者の心を想像したり、他者への思いやりを持ったりすることができないのである。つまり、ＡＩは「心」を持て

ないということだ。人間であれば、相手を思いやり社会性の高い判断・行動をする、ということができる。これが社会全体を発展させる大きな力となってきたのであり、人間の圧倒的な優位性と言ってもいいであろう。

何かを決めようとした時に最も優先されるのが、情動を動かした情報であることは説明してきた。(3)大昔は、それこそが生存のために重要なことであり、情動を動かす情報に迅速に対応したものが生き残った。恐怖や怒りの原因となったことにはいち早く決断をして行動に移さなければならないので、*扁桃体からの指令は最優先事項となるわけだ。多くの場合、猛獣の存在や食料不足、天変地異などが恐怖や怒りの原因となった。

もちろん例外はあるが、今の時代に我々の最大の脅威となるのは、猛獣でも天変地異でもなく、同じ社会に住む人間である。社会生活を送り、皆で守りを固めて食料を備蓄しておけば、人間にとっての脅威は外敵ではなく、仲間の裏切りや食料の収奪ということになる。同じ社会の仲間から「変な奴」と思われたら、その社会から追い出されてしまうだろう。それは当然、生きていけなくなることを意味している。

社会で生きていくためには、その決定に他者への配慮はあるのか、という点を自問自答している必要があるわけだ。

高度な社会性を獲得した人間の脳は、単純な自分の欲求を満たすことよりも、直接ではなくても巡り巡って自分の収穫を高めるであろう行動をシミュレーションして選択することが可能になった。

他者が何を感じ、何を考えているか推測して社会的な行動を取る、というシミュレーションにおいて重要な働きをするのが、「想像力」である。そして、この想像力、つまり「心の理論」の基盤となっているのが*分散系であることが、多くの研究で示されている。他者の気持ちを類推する時に、分散系の主たる構成領域である*帯状回後部や*前頭前野内側部が活性化していたのである。

そしてさらに、食べ物の獲得や他人からの賞賛など直接自分の欲求を満たす報酬の場合と、想像力を働かせて自分の欲求とは直接関係のない「社会性のある利他的行動」をした時に得られる報酬とでは、活性化される脳の部位が違うことが示されている。

バーミンガム大学のロックウッドらは、肉体的な負荷を伴う仕事を選択する時に自己の利益を優先するか、他者に配慮した判断をするかという選択肢において、脳のどの部位が活性化するかについて*ｆＭＲＩを用いて調べた。その結果、自己の利益を優先した場合には腹側被蓋野と呼ばれる*脳幹の中脳背側部が活性化していた。この部分は系統発生学的に古い部分であり、本能的な欲求を優先する場合に活性化して、*ドーパミン神経などを使って行動を起こさせる。

一方、利他的な行動選択をする時には、前帯状回という前頭前野と深い関係を持つ領域が活性化していた。帯状回は分散系の主な構成要素であり、利他的な行動は前帯状回が広い範囲の脳に働きかけることによって可能になることが示されたのである。

他者の心を推測するためには、その場の状況や他者の表情・行動・声などを分析して、自分の過去の膨大な意味記憶にアクセスしてそれを照合してみる必要があるからだ。分散系の活性化が想像力を生み出し、利他的な行動へとつながっていく。

こういった利他的で社会性の高い行動は、その人の身体的・精神的健康

を高め、社会的な安定と経済的な成功をもたらすことも示されている。会話には毛づくろいと同様に個体間の信頼関係を深め、精神的安定をもたらす効果が見られるが、想像力を働かせることで、各個人の精神的な健康度はさらに高まるのである。

身体を持たないＡＩには、他者の心をくみ取る想像力がないため、他者への思いやりや共感するということもできないであろう。ＡＩには心がないのである。人間がリードしていかない限り、ＡＩどうしで高度なコミュニケーションを取り、協力して新たなアイデアを作るということも難しいだろう。仕事の効率化、便利さという点でＡＩの貢献度は非常に大きくなると思われるが、人類全体の進化の歴史から見た時、未来に向かって共同体としての社会全体を発展させていく力は、結局人間にしかないとみるのが妥当ではないだろうか。

（岩立康男「直観脳」による）

〔注〕
扁桃体（へんとうたい）――主に情動反応や記憶に関係する脳の部位。
分散系――何かに集中している時には活性化しない脳の領域。
帯状回――主に感情や学習、記憶などに関係する脳の部位。
前頭前野――記憶や感情制御、行動抑制等に関係する脳の部位。
ｆＭＲＩ――電磁波を用いた装置（ＭＲＩ）を使って、脳活動を調べる方法。
脳幹――脳の中心にある、幹のような形の器官。中脳背側部は、脳幹の一部位のことを指す。
ドーパミン神経――快感・意欲の獲得、運動調節などに関わる、ドーパミンという脳内物質を伝える神経。

〔問１〕(1)この違いは決定的であり、「全く違う系統の知性」と言ってもいいだろう。とあるが、脳とＡＩは、どのような意味で「全く違う系統の知性」と言えるか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 脳は対象を絞って詳細な情報を得ようとする性質の知性で、ＡＩは大量の雑多な情報を全て取り込もうとする性質の知性という点で全く違う系統だと言える。

イ 脳は全ての情報をそのまま受け入れようとする性質の知性で、ＡＩは全ての情報を分析して取り込もうとする性質の知性という点で全く違う系統だと言える。

ウ 脳は一つの対象に注目して情報の解像度を重視する知性で、ＡＩは複数の対象に注目して情報の正確性を重視する知性という点で全く違う系統だと言える。

エ 脳は異なる複数分野の情報を得ようとする性質の知性で、ＡＩは単一の分野の情報を絞り込んで得ようとする性質の知性という点で全く違う系統だと言える。

〔問2〕(2)人間とＡＩとでは、言語の扱い方も違う。とあるが、ＡＩの「言語の扱い方」についての説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア その場の状況に合っていて最も妥当である単語を確率論的に予測し、データ内から無作為に選んだ文章構造パターンに当てはめていっている。

イ 最初に文章全体の適切な構造を確率論的に予測して把握し、直近で登録された単語をデータ内から優先して選びつつ当てはめていっている。

ウ あらかじめ文章構造を把握して作成をするのではなく、その単語の次に来る確率の高い単語をデータ内から選び出してつないでいっている。

エ 文頭から文章を新規作成するのではなく、似た状況で使われた文章をデータ内から選び、単語だけをランダムに変えてつないでいっている。

〔問3〕(3)大昔は、それこそが生存のために重要なことであり、情動を動かす情報に迅速に対応したものが生き残った。とあるが、現代における、「情動を動かす情報」として最も重要だと言えるものを、本文中から十字以上十五字以内で抜き出して書け。

〔問4〕この文章の内容に合っているものは、次のうちではどれか。

ア 現在のＡＩは脳の分散系の構造をデータで再現することはできるが、他者の存在を認知できないので、人間のように社会を発展させていくほどの想像力は持てないと考えられる。

イ ＡＩは身体がない分、物理的な限界がある人間よりも情報収集や効率の点で優位に立っているので、人間は今後ＡＩの力を活用することで、社会全体を最適化していく必要がある。

ウ 身体がなく人間と異なる思考形態をしているＡＩは、現時点では社会性の高い判断や行動ができないが、今後の技術発展次第では人間が持っている社会性を超える可能性がある。

エ 身体のないＡＩは、他者の心をくみ取る想像力も持てないので、社会性の高い判断や行動ができないが、人間は想像力を活用して共同体としての社会全体を発展させることができる。

〔問5〕 この文章の構成について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 前半でＡＩと人間のもつ創造性や社会性の共通点を示しつつも、後半で身体がある人間だけがもつことができる知性の特徴を述べることで、文章の主題となるＡＩと人間の差異についてわかりやすくしている。

イ 初めに人間とＡＩの情報処理の手法を具体的に比較した後に、人間の知性についての主張を述べ、人間の社会形成の歴史や脳の部位の反応など主張に関連する話題を詳しく語り、最終的に再び主張をまとめている。

ウ 前半、後半ともに対比の構造を用いて、人間とＡＩ両方の知性についての見解を深めていくことで、共同体である人間社会の発展にＡＩの知性が今後どう貢献していくかという疑問の答えを最終的に推測している。

エ 初めに人間社会に対するＡＩの高い貢献性を示したうえで、本論ではＡＩと人間の思考形態の比較やそれぞれの創造性が発揮される場面について論じ、最後に冒頭で示した内容を結論として改めて提示している。

〔問6〕 筆者は本文で、ＡＩに対する人間の優位性について触れている。あなたは、日常のどのようなものごとについて、人間が行う方がＡＩや機械が行うよりもよいと考えるか。具体的な例を挙げ、二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「 などもそれぞれ字数に数えよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文のあとの［　　］には、本文中の古文**A**～**I**の現代語訳である。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔**注**〕がある。）

鴨長明（かものちょうめい）は地下（＊じげ）の人とはいえ上流階級に属する人である。十八歳で父を失って「みなし子」になるまでは、いやおそらくそれ以後も三十歳で祖母の家を出されるまでは、大邸宅に住み、多くの召使（めしつか）いを使っていただろう。こういう身分の人は、何であれ自分では働かない。みな人に命じてさせるものだ。

わたしがその昔インドからヒマラヤ山麓へトレッキングをしたとき、われわれの隊に看視役としてインド人の＊リエーゾン・オフィサーがついた。これが＊カーストの最高階級の男で、それがカーストの定めであるのか、自分では何一つやらぬやつだった。われわれが朝出発の準備をし、掃除をし、食事の準備に忙しく立ち働いていても、それを横目で見て自分は何も手伝わない。人間はそういうものとして育てられ、そうやって生きていると、すまないという感情さえ湧かないようになることを、わたしはこの将校を見ていて知った。

長明さんも三十まではそれだったはずである。(1)それが方丈の極小住居を住（す）まいとしてからは、すべて自分でやるようになったのだから、これは一大決意の一大変化だと言ってよい。

A　――もし、なすべき事あれば、すなはち、おのが身を使ふ。

この当（あた）り前のことが、彼にとっては、途方もない決心と覚悟をして初めて可能になったのだ。が、わたしはそれはそうだったろうと思う。だがそれでもなお、身を労して働くことは下層階級のすることだという先入見が抜けないのか、

B　――手の奴（やつこ）、足の乗物（のりもの）、よくわが心にかなへり。

と見ているところが面白い。

しかし長明さんは五十を過ぎて初めて、日常の仕事は、掃除、食事の仕度、後片付けなど全部自分でやり、さらに牛車（ぎっしゃ）などを使わずどこへゆくにも自分の足で歩くようになったのだ。これは当時の上流階級人としては、生き方の革命的な変貌だったであろう。しかもその上、食糧とて自給自足で森の木の実を拾い、食えるものを探し、着るのは、「藤の衣」、寝具は「麻の衾（ふすま）」という次第で、生活ががらっと根底から一変した。

そして、わたしが彼に感歎（かんたん）するのは、そういう本来なら堪えがたい生き方の変化を彼は肯定的に受け入れ、そのよさを強調していることだ。

C　――常に歩（あり）き、常に働くは、養性なるべし。なんぞ、いたづらに休み居（を）らん。

平安貴族などは、ふだん己は何一つ身を労せず、召使いの作るうまいものを食って、外出はもっぱら牛車を用いて自分は歩かず、口は達者でも体力、とくに持久力に欠けていただろう。長明もかつてはそれに近い生活をしていたのだろうが、山中独居の暮（くら）しになって、逆にからだは強壮になったに違いない。彼が記す山歩きの行動半径は十キロ以上に及んで、実に達者なものである。だから当時ではもう老人に属する五十七の年ではるか

彼方鎌倉までの旅をすることができたのだ。

それぱかりではない、彼はもはや人にどう見られるかということにさえ、平然としていられるようになったのだ。

D ――人に交はらざれば、姿を恥づる悔いもなし。

彼に好意的だった源家長(2)*は、出家遁世後の鴨長明に遭ったことがあり、その印象を日記に、

E ――其後おもひかけず対面して侍しに、それかとも見えぬほどにやせをとろへて、

（石田吉貞校『源家長日記』古典文庫）

と記している。家長は長明が痩せこけたのにショックを受けたのだが、あにはからんや、それこそ長明がもはや美食せず、車に乗らず、粗食をしみずから歩き回る「養性」の姿だったのである。

F ――命は天運にまかせて、惜まず、いとはず。

これこそ悟りの境地といっていい。この身は自分のものであるけれども因果の律の下にある以上、生に執着し、死を恐れたとて詮ないことだ。それはすべて天運に任せきってしまおう。ひとたびそうと覚悟を定めれば、わが身は空に浮ぶ雲と同じく、自然に任せきって、*任運騰騰、なんのわずらいも心配もない。一期のたのしみは、そのときどきが与えてくれるものを味わって、心しずかに生きることだ。それでこそ生をたのしむということだ。そういう境地に、ついに長明氏は達したのである。この時代に、おそらく彼くらい徹底してそういう心一つに生きる自由人の境地に達した人は、隠者の先輩西行*ぐらいしかいなかったに違いない。

つまり長明さんにとって、傍目には*落魄としか見えないこの方丈の暮しが、実は理想的な生き方の達成、実現になったのである。

G ――おほかた、世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。

世間の目で見れば、上流階級社会をとびだし、ふつうの社会生活をさえ捨てて、まったくの一人ぼっち、収入もない孤独な境界に落ちた気の毒な人と見えたであろう生存形態が、彼にとってはこの世のあらゆるわずらいから解放され、人を恨んだり、恐れたりすることも一切なくなった、この上ない自由な境界に入ったことを意味したのだ。誰の*掣肘を受けることもなく何をするのも自由なら、何をしないのもわが心のままという、これ以上の生存は彼には存在しなかったのだ。

H それ、三界は、ただ心一つなり。心、もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿・楼閣も望みなし。今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でて、身の乞匄となれる事を恥づといへども、帰りてここに居る時は、他の俗塵に馳する事をあはれむ。もし、人このいへる事を疑はば、魚と鳥との有様を見よ。魚は、水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は、林を願ふ。鳥にあらざればその心を知らず。閑居の気味も、また同じ。住まずして、誰かさとらん。

前に述べた心境を、さらに煮つめて、「それ、三界は、ただ心一つなり」

の一語によって言いあらわしたものである。

「三界唯一心」は、仏典をのぞけばいたるところに出てくる常套句だが、長明がみずからの生き方の大革命をふまえた上で言うと、説得力がある。この世界はまさに心の持ちよう一つで、同じ事態が幸せのたねともなるし、不幸のたねともなる。

大邸宅でなければ立派な住居と思えぬ人にとっては、方丈の極小住宅など住むにも値しないものだろうが、もし目を心の安らかさ、安心というところに向け、安心こそが人生で最も尊いと思う人には、方丈の住居こそがそれを保証する唯一の生存形態になるのである。われわれはそれを西行を初めとして*良寛にいたるまでこの国の隠者たちの草庵暮しによって知る。『論語』にも、孔子が*顔回をほめていう言葉にその思想がある。

I 子曰く、賢なるかな回や。一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人はその憂いに堪えず、回はその楽しみを改めず。賢なるかな、回や。

（『論語』雍也　貝塚茂樹責任編集『世界の名著3　孔子　孟子』所収。中央公論社刊）

東洋にはさらに「*大隠は市にかくる」という言葉もあり、真に道に生きる人、人生に忠実に生きる人は、大邸宅に住むような人にはなく、むしろ貧しい簡素な暮しをする人の中にある、という思想の伝統があるのだ。鴨長明は、さまざまな試行錯誤の末に、ついにその伝統にたどりついたのである。

――心、もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿・楼閣も望みなし。今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。

いい言葉だ、と思う。

（中野孝次「すらすら読める方丈記」による）

A もし、するべきことがあれば、さっさと、自分の身を使う。

B 手の召使い、足の乗り物は、よく思い通りになる。

C 常に歩き、常に働くのが、（なによりの）養生であろう。どうして、むだに休んでいるのか。

D （世に出て）人と交際しなければ、（みすぼらしい）姿を恥じるような後悔もしない。

E その後思いがけず対面しましたところ、その人（＝長明）とも見えないほどにやせ衰えて、

F 命は天運にまかせて、（命を）惜しまず、（死ぬことも）嫌がらない。

G 大体、（私は）世を逃れ、身を捨ててから、恨みもなく、恐れもない。

H さて、（仏の教えに）三界は、ただ心一つなり（とある）。心が、もし安らかでないならば、象や馬とか七種の財宝も意味がなく、宮

殿や楼閣も望むところでない。今、閑寂な住居、一間の庵、自分はこれを愛している。たまに都に出て、（この）身が乞食（のよう）になったことを恥じるといえども、帰ってここにいる時は、他の（人々が）俗世間のわずらわしいことに思いを向けていることをあわれむ。もし、（他の）人がこの（私の）言うことを疑うなら、魚と鳥の生き方を見なさい。魚は（都でなく水の中に住んで）、水に飽くことがない。魚でなければ、その心はわからない。鳥は（都でなく）、林を恋うる。鳥でなければ、その心はわからない。閑居の味わいも、また同じ（ことだ）。住まないで、誰が（どうして）わかるだろう。

I　先生がおっしゃった、偉いなぁ、回（＝顔回）は。竹の椀一杯分のご飯、ひょうたんの椀一杯分の飲み物（だけで）、せまい路地で暮らしている。（普通の）人はその苦しみに堪えられない（が）、回はその楽しみを改めない（＝楽しそうに暮らしている）。偉いなぁ、回は。

〔注〕
地下の人――殿上を許されていない人。位の低い官人。
リエーゾン・オフィサー――二つの組織間の連絡・調整役。
カースト――インドに根付く社会身分制度。
源家長――鎌倉時代前期の公家・歌人。
任運騰騰――作為を加えず、運を天に任せること。
西行――平安時代末期～鎌倉時代初期の僧・歌人。
落魄――落ちぶれること。
掣肘――横から、あれこれと干渉されること。
良寛――江戸時代後期の僧・歌人。
顔回――孔子の弟子。弟子の中でも最も優れていたとされる。
大隠――悟りきって、世間を超越した隠者。

〔問1〕(1)それが方丈の極小住居を住いとしてからは、すべて自分でやるようになったのだから、これは一大決意の一大変化だと言ってよい。とあるが、「一大決意の一大変化」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　大邸宅に住んで多くの召使いを使っていた父が他人の手伝いをすることなく生きていることに対して、疑問を抱いていたはずの長明が、一人で住む際には自分ですべてをやることに決めたということ。

イ　十八歳で父を失って「みなし子」となってしまったことにより、自分では働かない人間から命じられるままに働くことを受け入れてきたはずの長明が、その環境を離れて一人で生き始めたということ。

ウ　上流階級に生まれ育ったために、自分で何もすることなく他人を働かせることに対して疑問を抱いてこなかったはずの長明が、やるべきことは他人を頼ることなくやるのだと意識を変えたということ。

エ　自分のために身の回りの世話をしてくれている人がいても、それに対して何の感情も湧かない人間だったはずの長明が、一人暮らしを経験してからは自分が他人のために動くようになったということ。

〔問2〕 **B**についての説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 下層階級の手足が自分の思うように動いているのだと捉えて、他人の力を借りずにやるべきことを自分でこなしていることを表現している。

イ 自分から見て下層階級にあたる者を自分の手や足のように使うことにより、どのようなこともやりこなすことができる思いを表現している。

ウ 自分一人ですべてのことをこなしてはいるものの、手も足も自分のものとは思えないような動きをしていると感じる戸惑いを表現している。

エ 手や足として自分のために働いてくれていた下層階級の者の働きぶりは、自分の今の働きぶりよりすぐれていたという事実を表現している。

〔問3〕 (2)源家長は、出家遁世後の鴨長明に遭った とあるが、このときの家長について説明した次の文の 1 ～ 3 に入る最も適切な言葉を、本文中から 1 は**三字**、 2 は**四字**、 3 は**六字**で抜き出して書け。

日常的に 1 をし、食糧なども自然の中で 2 しているという、長明の 3 を目にして、このときの家長は否定的に捉えた。一方、本文の筆者は、長明は自由人の境地に達したのだと捉えている。

〔問4〕 筆者は、**F**・**G**の古文に、長明の何が感じ取れると考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 宮廷社会の中であくせくと働いて富や権力を得るよりも、自然の中で和歌を詠(よ)んで真の風流を追い求めていきたいという高尚な心持ち。

イ あれこれと先の事を考えて思いわずらうよりも、自分が好ましいと思うことを追求する方が幸運もめぐって来るだろうという楽観的な境地。

ウ 人からただ与えられるだけの生活をするよりも、質素な暮らしの中で、こつこつと自分の力だけで誠実に生きていこうとする勤勉な心模様。

エ 他人からはわびしく孤独に思われる生活の中で、世俗的な執着や恐れなどを捨て、すべて自然に任せて生きていけるという制約のない心境。

〔問5〕 この文章全体で説明されている長明の生き方と、**I**の古文の内容に共通することとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 出家して仏道修行をしようとする人は、人との交流を絶ち、魚や鳥のように自然の掟(おきて)に逆らわない生活をしようとするということ。

イ 心の安らぎを大切にする人は、豪華で立派な邸宅に住むようなことはしなくなり、質素な暮らしに行き着くようになるということ。

ウ 豊かに生まれついた人は、立派で見栄えのすることを好むが、貧乏人として生まれた人は、見かけで物事を判断しないということ。

エ 真に優れた才能や知恵を持つ人は、どんな境遇でも不平不満を持たずに、工夫をこらして質素な生活を楽しもうとするということ。

二〇二六年度　郁文館高等学校　都立自校作成型オープン試験

（国語）解答用紙

1

(1) 畏れる	れる
(2) 遵守	
(3) 諮って	って
(4) 嘱望	
(5) 綱紀粛正	

2

(1) ケワしい	しい
(2) ケイテキ	
(3) セイフン	
(4) モウける	ける
(5) キキュウソンボウ	

3

〔問1〕

〔問2〕

〔問3〕

〔問4〕

〔問5〕

50

4

〔問1〕

〔問2〕

〔問3〕

〔問4〕

〔問5〕

〔問6〕

200　100　25

5

〔問1〕

〔問2〕

〔問3〕 1 2 3

〔問4〕

〔問5〕

受験番号		氏　名	